

## 組織的な大学院教育改革推進プログラム 平成21年度採択プログラム 事業結果報告書

教育プログラムの名称	: 感染制御看護師 (ICN) 養成プログラム
機 関 名	: 久留米大学
主たる研究科・専攻等	: 久留米大学大学院医学研究科 修士課程
取 組 代 表 者 名	: 三橋 睦子
キ ー ワ ー ド	: 公衆衛生看護学、感染制御学、国際感染症学、医学統計、災害看護

### I. 研究科・専攻の概要・目的

久留米大学大学院医学研究科は、医学・医療の分野で先駆的な学術研究を推進するとともに、幅広い視野、高度の専門性と豊かな教養及び人間性を備え、国際的に活躍し、地域医療に貢献しうる優れた人材を育成することを目的としており、この研究科目的のもと、修士課程においては医学以外の学問的背景をもち、医学・医療に貢献することを目指す人材を対象に、各専攻分野の研究能力及び高度の専門性が求められる職業を担うための卓越した能力、教養、人間性を備えた人材を育成することを目的としている。

修士課程の入学対象者は学士のほか、医療系の国家資格有資格者へも門戸を開放しており、更なるスキルアップを目指した社会人は昼夜開講制や長期履修制度（標準在籍期間3年）を利用し仕事と勉学を両立しながら修学している。

修士課程医科学専攻内には、基礎医学群・社会医学群・分子生命科学群・臨床看護学群・バイオ統計学群の5つの学群があり、それぞれ医学系大学院の豊富な資源に立脚したコースワークを設定している。

特色ある大学院教育としては、リサーチナースとしての実践指導を行う「リサーチナース養成ユニット」及び生理系講座を中心に特有の実験に横断的に参画することにより基礎的教養を深める「先端的・分野特異的研究手法体験ユニット」の設置、リハビリテーション分野の高度な職業人及び教育者の養成のためリハビリテーションバイオメカニクス学の開設が挙げられる。

また、臨床看護学群においてはがん、感染、老人看護専門看護師教育課程を設置し、各課程とも日本看護系大学協議会より課程認定を受け、専門看護師養成のための充実が図られている。

修士課程医科学専攻の学生定員は25名であり、入学者については年によって若干ばらつきがあるものの毎年在籍者数50名前後を維持することができている。これら学生（平成23年5月1日現在 在籍学生数46名）の教育には医学科及び看護学科などを本務とする教員があたっており、大学内での組織的な教育・研究支援体制を確保している。

### II. 教育プログラムの目的・特色

感染症看護のスペシャリストとして必要な看護実践能力を有し、包括チームあるいは危機管理等において、教育、相談、研究、調整、倫理調整等の役割が果たせる人間性豊かな人材を育成し、医療を受ける人びととその家族、医療機関で働く人びと、地域の人びとへ貢献できる人材育成を目的とする。

本プログラムの特徴は、看護師・保健師・助産師のキャリアアップコースとして、高度な専門知識や実践力を涵養する共通カリキュラムを履修後、1つは、発展途上国や大災害など集団感染症の国際的現場で、感染症の危機管理活動が実践できるICNの育成を目指したアドバンスド・プログラムと、もう1つは、国内の臨床や地域の国際的な感染症問題にも対応できるICNを養成するプロフェッショナル・プログラムの類型化した2つのコースを設置していることである。

### Ⅲ. 教育プログラムの実施計画の概要（図1）

#### 1. 平成 21 年度:

- (1) 共通・専門科目教育の実施:「**実践**」「**相談**」「**調整**」「**倫理調整**」「**教育**」「**研究**」の6つの役割を担うための**共通・専門科目**を必須科目として開講した。
- (2) 各キャリアに応じた基礎教育の補完:**基礎医学群、社会医学群、分子生命科学群、臨床看護学群、バイオ統計学群**の複数の履修コースの中からキャリアに応じて科目の選択を可能とした。
- (3) 課題研究報告書支援:修士課程他学群を対象として、研究デザインの立案、データ解析、解析結果の解釈とライティングなどについて履修できる「**バイオ統計基礎ユニット**」「**バイオ統計応用ユニット**」をバイオ統計群で開講した。
- (4) 感染看護の専門教育として、「**感染看護特論**」「**感染看護疫学論**」に加えて、**細菌・ウイルスなどの取り扱い方および診断のための検査や実験、大学病院感染制御部のICT活動の参加**、災害時の集団感染症の発生あるいは感染症アウトブレイクを想定した**机上シミュレーション**を組み込んだ「**感染看護演習 I・II**」「**感染看護援助論 I・II**」の科目を開講した。

#### 2. 平成 22 年度:

- (5) 平成 21 年度実施計画 1)～4) を継続し、講義に加えて、演習・訓練・**特殊災害を想定したシミュレーション演習**を実施した。**防護具着用、除染テント、除染方法、搬送方法**、についてマニュアル作成を行った。
- (6) **大学院生との合同講義・セミナーの開催**:国内外の第一線で活躍するICTや公衆衛生活動家のセミナーを開催した。ネイティブによるTAの支援を受けながら、English Medical Presentationsの講義を実施した。
- (7) **国立感染症研究所感染症情報センターでのFETP - J参加**:1ヶ月間の短期フィールドワークに参加し、アドバンスド・プログラムにおける「**国際感染看護学実習 I**」(平成22年度開設)の科目とした。
- (8) **臨地におけるフィールドワーク(プロフェッショナル・プログラム)**:感染症患者の看護および包括医療、医療施設における感染制御あるいは地域のICT活動などについて実習できるように、**感染看護実習 I・II**を開設・実施した。**感染看護実習 I**では、**東京慈恵医科大学附属病院、名古屋大学医学部附属病院**をフィールドとして、指導体制および指導者との調整を行い、2週間で主にICT活動や患者および医療従事者への感染予防教育・指導等を展開する。**感染症看護実習 II**では、6週間で感染症患者3事例を受け持ち看護過程を展開し、包括医療等を通じた調整・コンサルテーション・倫理問題・教育・研究等に取り組む活動を行う。

#### 3. 平成 23 年度:

- (9) 平成 21・22 年度計画の 1)～8) を継続しながら、さらにカリキュラムの充実化を図る。
- (10) 感染拡大状況を想定した感染制御マニュアルの作成:バイオテロを想定したシミュレーションを企画した。企画そのものもマニュアルとして、他大学あるいは施設などで幅広い展開ができるように資料等作成する。
- (11) **臨地におけるフィールドワーク(プロフェッショナル・プログラム)**:新たに**神戸市立医療センター中央市民病院、九州医療センター**をフィールドとして加え、指導体制および指導者との調整を行い、**感染看護実習 I・II**を継続した。
- (12) **国際実践フィールドワーク(アドバンスド・プログラム)**:「**国際感染看護学実習 II**」として、メルボルンで開催されたAPSIC:The 5<sup>th</sup> International Congress of the Asia Pacific Society of Infection Controlでの研究発表と、The Royal Melbourne HospitalおよびVictorian Infections Diseases Referenceの視察を企画・実施した。

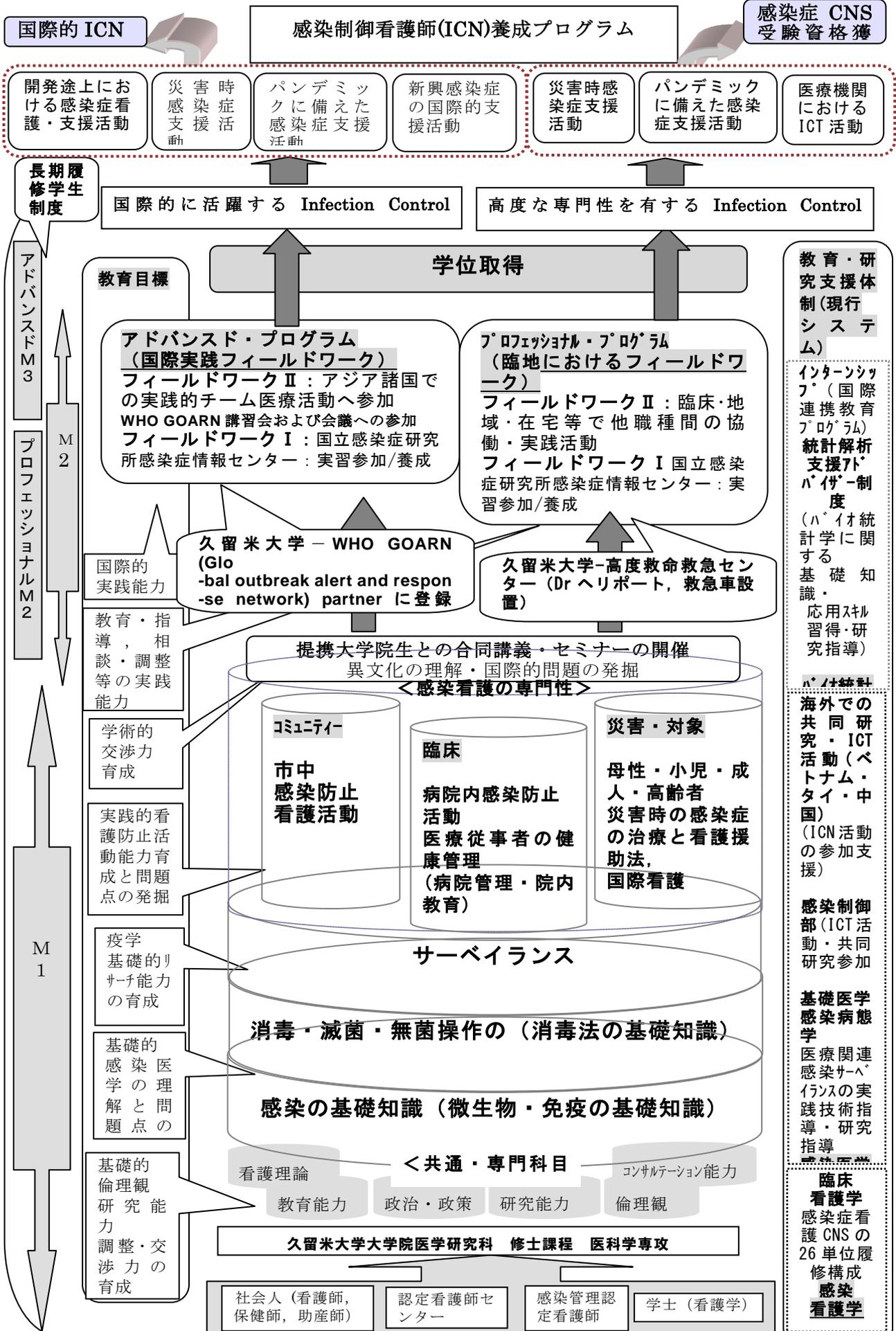


図 1 履修プロセスの概念図

#### IV. 教育プログラムの実施結果

##### 1. 教育プログラムの実施による大学教育の改善・充実について

(1)教育プログラムの実施計画が着実に実施され、大学院教育の改善・充実に貢献したか

##### ① 共通カリキュラム

アドバンスド・プログラムおよびプロフェッショナルプログラムの共通カリキュラムには、高度な知識と的確な臨床判断、倫理的態度に基づいた看護実践力や危機管理能力に加え、国際的公衆衛生の第一線で貢献できる、優れた調整能力や交渉力が求められており、看護理論・教育能力・政治・政策・研究能力・倫理観・コンサルテーションの科目を配置する。専門的には、感染基礎を2単位、応用無菌法・サーベイランスについて4単位、コミュニティー・臨床・対象別・災害における感染症看護および予防について8単位で科目を構成し、下記の進度でカリキュラムを展開した(図2)。

##### ② 共通科目および専門科目の授業展開

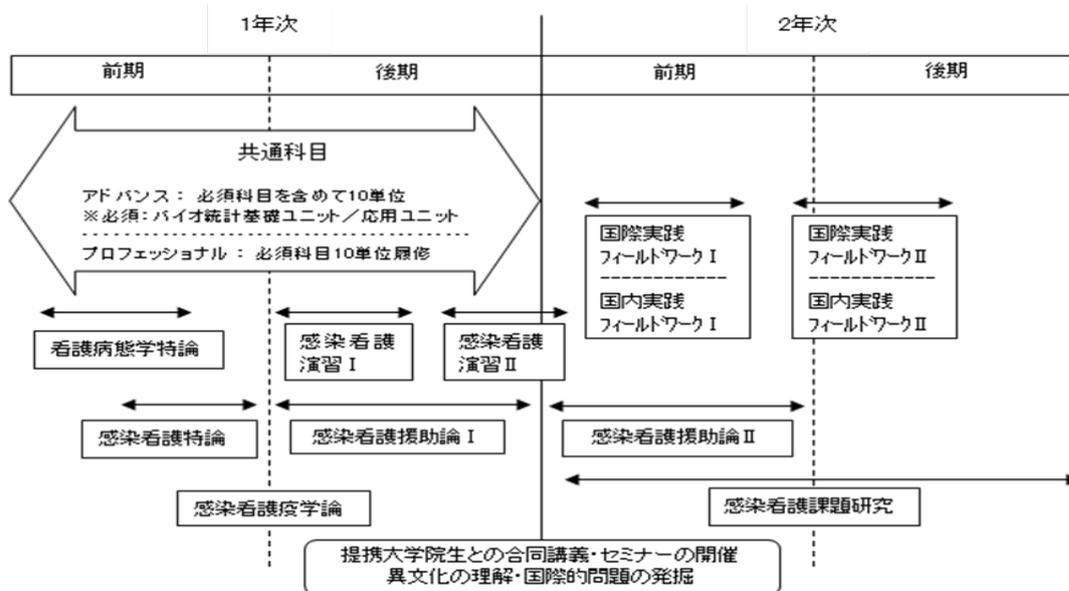


図2 共通科目および専門科目の履修モデル

##### ③ フィールドワーク(実習)(表1)

国内における感染看護実習については、毎年実習要項を作成し、院生のキャリア・希望に応じて目的、方法、指導体制、課題等について提示し、実習環境・指導体制について事前調整を行った。実習期間中(I:2週間・II:6週間)は、1週間に1~2度の指導者および教育担当者、包括医療チーム等とカンファレンスを行い、適宜メールや電話での指導を行った。修了後は実習の報告会を実施し、他学生や興味のある看護師等と学びの共有および評価を行った。

表1 各実習科目の実習施設と内容

科目: 感染看護実習 I・II (国内実習)	東京慈恵医科大学附属病院、神戸市立医療センター中央市民病院、九州医療センター、名古屋大学医学部附属病院等をフィールドとして、実習 I では感染制御 ICT 活動を主として、実習 II では感染症患者の看護と包括的医療等での調整・コンサルテーション・教育支援・倫理調整等の看護活動を主として実習する。
科目: 国際感染症看護実習 I (国内実習)	国立感染症研究所 感染症情報センター FETP-J: Field Epidemiology Training Program Introductory Course : 実地疫学者専門者養成コースの1カ月間初期導入コースを受講
科目: 国際感染症看護実習 II (国外実習)	<ul style="list-style-type: none"> <li>■国際学会発表 APSIC: The 5<sup>th</sup> International Congress of the Asia Pacific Society of Infection Control (Melbourne)</li> <li>■国際 ICT 活動視察(医療施設) <ul style="list-style-type: none"> <li>・The Royal Melbourne Hospital ER</li> <li>・Victorian Infections Diseases Reference</li> </ul> </li> </ul>

④ 感染看護実習報告会の開催 (2012年3月16日)

演題は、「感染症疫学の必要性 ～F E T P初期導入コースにおける学び～」 「易感染患者3症例における感染症のリスクアセスメントを通して」 「脾臓摘出患者の感染看護」 「多発性のう胞腎患者における アシネトバクター・バウマニ菌血症の感染症看護」の4題であった(写真1)。

特別発言として、感染症 CNS の実習生、指導者と2つの貴重なご経験のある神戸市立医療センター中央市民病院 感染管理室 副室長 感染症看護専門看護師の立溝江三子を講師に「感染症看護専門看護師育成のための実習のあり方」について講演後、学生とシンポジウム形式で討論会を開催した(写真2)。



写真1 実習報告の様子



写真2 討論会の様子

⑤ 研究プロジェクトへの参加と国際学会 (APSIC) での発表

科学研究費補助金研究 (課題番号: 19592618) 研究課題: 感染症に強い地域ネットワーク構築を目指した教育と参画型介入の実証的研究 (Empirical study of education and participatory intervention for development of an infection-resistant community network) の研究プロジェクトにおける在日外国人を対象とした介入研究に研究協力者として参加し、成果をAPSICにて発表した(図3)。

The 5th International Congress APSIC

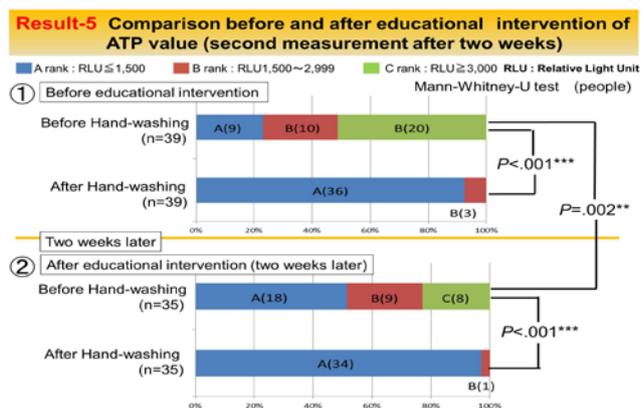
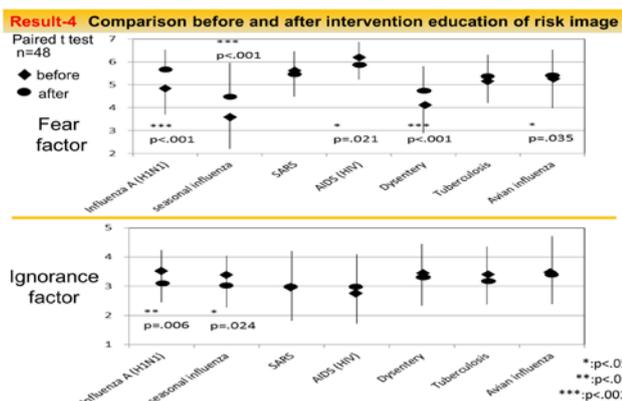
Title : The way of educating foreigners living in Japan on the prevention of infectious disease.

【Subjects】

A university students : 45 people

B foreign language school students : 40 people

Questionnaires returned : 74.1% (63 peoples)



Summary

1. The length of stay in Japan for the subjects was in general about only one to two years with most coming from Southeast Asia. The percentage of subjects of this study who had received previous mask education was about 30%, for hand-washing education it was about 60%. It can be considered insufficient.

2. In the risk image, a significant rise of the fear factor score was found in influenza A (H1N1) and seasonal influenza risk together with, a significant decrease of the ignorance factor score. The WHO phase 6 declaration on the 2009 A (H1N1) influenza resulted in a growing feeling of a globally high risk. From this effect it is thought the change in risk image after the educational intervention is valid.

3. From comparing ATP contamination rankings, considering that proper hygiene practices continue for two weeks after the educational intervention. The possibility of a change in hygiene practices from this education for foreigners living in Japan is suggested.

This study is subsidized by a scientific research grant C (19592618).

図3 研究発表ポスターの一部

## ⑥ 2011年12月13日 国立感染看護実習Ⅱの報告会を開催

アジア諸国の医療従事者が、それぞれの国で感染制御として取り組んでいる状況を発表し共有しあうことを目的に設立された、国際学会 APSIC (The 5th International Congress of the Asia Pacific Society of Infection Control) が、2011年11月7日～13日オーストラリアのメルボルンで開催された。アドバンスド・プログラムコースを履修している学生が、“The Way of Educating Foreigners Living in Japan on the Prevention of Infectious Disease”のテーマで、ポスター発表し、後に意見交換を行った(写真3、4)。

また、1848年に開設され、オーストラリアでは最も古く、地域の中核病院である“The Royal Melbourne Hospital”の ER (写真5、6) と、WHOのリファレンスラボとしての役割を持つ“Victorian Diseases Reference Laboratory (ビクトリア州感染症研究所)”(写真7、8)の2つの施設の視察を行い、「Victorian Infections Diseases Reference Laboratory と国内の国立感染症研究所との比較」をテーマに報告(写真9)を行った(参加者19名)。



写真3  
APSIDにおける研究発表



写真4  
APSIDにおける研究発表



写真5 The Royal  
Melbourne Hospital  
の外観



写真6 The Royal  
Melbourne Hospital  
のER



写真7 VIDRLの外観



写真8 VIDRLの研究設備



写真9  
国際感染看護学実習Ⅱ報告会

## ⑦ 講演会・セミナー等の開催

### 2009年

1) 講演会開催：12月15日(参加者19名)

テーマ「日本におけるICN活動報告」講師「川野佐由理」、  
テーマ「オーストラリアにおけるICN活動の現状と未来」「A型インフルエンザ-H1N1」「未知なる世界への旅」「2003年中国SARS発生時WHOでの短期コンサルタントとしての経験」講師「Siew Stielow Infection Consultant Radiation Safety Officer」

2) 特別講義(大学院セミナー)開催：2009年12月16日(参加者61名)(写真10、11、12)

テーマ「今なぜICNが必要か ー世界が求めるICNの活動とはー」講師「Siew Stielow」



写真10 セミナーの様子①



写真11 セミナーの様子②



写真12 大学病院リンクナース会議

## 2010年

- 1) 第1回 セミナー（講義・演習）開催：2010年6月28日（写真13）  
 テーマ「特殊災害への対応（細菌アウトブレイク・化学物質・放射線）」講師「今中聡；英国スタッフ  
 フォードシヤ救急局 S.C.A.T JAPAN 特殊災害医療チーム一員」
- 2) 第2回 セミナー（講義・演習）開催：2011年1月13日（写真14、15、16）  
 テーマ「特殊災害への対応Ⅱトリアージ設営及び対応の演習」講師「今中聡」



写真13 セミナー講師と参加者



写真14 TST防護服ユニットの装着



写真15 クリーンシェルター  
 および除染テント設営



写真16 除染訓練

- 3) 感染症看護に関する講演会開催：2011年2月24日（写真17、18、19）  
 演題1：「国際看護の現場のケアの特色—ハンセン病との関わりを通して—」講師「阿部春代：タイにてハンセン病患者の支援活動中」  
 演題2：「感染症ナースのキャリアデザイン—感染症対策に必要なケアの視点—」講師「堀成美：聖路加看護大学助教：国立感染症センターFETP2年修了」



写真17 講演会の様子①



写真18 講演会の様子②



写真19 講演会の様子③

- 4) English Medical Presentations 開設：2010年9月24日～2011年1月14日  
 海外での論文発表に必要なスキルの習得を目標に native による講義 15コマ（30時間）

- 国際学会における英語での挨拶方法・英語論文の検索方法（検索ソース等）
- poster presentation について    • poster presentation 作成方法（必要な概要と中身）
- poster presentation 作成、発表    • oral presentation について
- presentation の4つのアスペクト（Physical Aspects, Oral Aspects, Visual Aspects, Organizational Aspects）    • oral presentation 作成方法（必要な概要と中身）
- oral presentation における表現方法    • oral presentation 作成発表

## 2011年

- 1) バイオ統計セミナー開催：2011年6月14日・7月27日  
 研究過程、データ解析演習、JMP9.0ソフト使用法、症例数設計について、バイオ統計センター教授角間辰之による講義
- 2) 医療用陰圧テント学習会（演習）開催：2011年12月27日（写真20、21）  
 感染症対策用陰・陽圧式エアータントと病院用空気清浄機について講義、テント・病院用空気清浄機の設置、陰圧テントの運転、収納を演習



写真20 テントの展開



写真21 テントおよび空気清浄機の設置完了

- 3) 第3回セミナー開催：2012年3月16日（写真22）  
 テーマ「被災地における感染対策の考え方～医療従事者が被災者と自分を守るために公衆衛生の視点を学ぶ～」講師「高山義浩：沖縄県立中部病院感染症内科医師」
- 4) 国際感染看護学実習Ⅰ・Ⅱの実施と報告会の開催：報告会（2011年12月13日）（写真23）



写真22 セミナーの様子①



写真23 国際感染看護学実習報告会

- 5) 国内感染看護学実習Ⅰ・Ⅱの実施と報告会の開催：報告会（2012年3月16日）
- 6) 第1回 感染看護専門看護師教育課程 修士論文発表会（2012年2月9日）（写真24、25）



写真24 修士論文発表



写真25 修士論文発表者と指導者

## ⑧ プログラム実施による成果

### 教育課程の国際性にむけた編成状況

教育課程では、大学全体の取り組みとして協力体制は強化されており、履修生が興味を持つあるいは必要な科目履修が概ね履修可能な状況にある。さらに、久留米大学は既に WHO GOARN (Global outbreak alert and response network) partner に登録(2007.4)されており、大学として国際的な役割を担う立場にある。しかしこれからの世代を担う若い人材を育成する為の教育課程は希薄であり、大学院全体として取り組みには至っていなかった。本プログラムでは、世界的に活躍している感染症看護の実践家とのゼミやセミナー等を開催することで、ICN 養成の社会的必要性の理解を相互に共有する結果となった。こうした取り組みが、平成 23 年度の、国際看護実習における、国立感染症情報センター主催 FETP-J へ参加や、国際学会（オーストラリアで開催予定のアジア太平洋感染制御学会）での発表と、オーストラリアの ICT 活動・ICN の役割、WHO リファレンスラボトリーの視察を可能にした。また今後は、タイでのハンセン氏病看護活動への参加を検討しており、現地実践者との調整が可能な段階にある。

これらの取り組みにより、国際的な感染症看護のネットワークが可能となり、教育課程の組織的展開が強化された。これまで希薄であった国際的な課題や活動へ視野を広げ、大学院教育の改善・充実につながった。

### 学生の研究活動の活性化状況

疫学・サーベイランスの基礎となる統計手法の教育は、バイオ統計による年間を通じたアドバイザー制により充実し、細菌やウイルス等の取扱い方、環境調査方法等についての臨床的・実践的教育については、培養や細菌検査に必要な物品の充実により、適正な教育支援が充実してきている。また、感染症関連の図書も充実してきており、先行研究あるいはテキスト等の講読により、履修生の研究活動への意欲は向上し、環境感染調査に関連した研究計画書の立案、あるいは教室で実施している感染予防の普及活動のデータ分析等を積極的に実施している。

## 教育研究指導体制の改善状況

感染症ナースのキャリアデザインをテーマとしたセミナーやタイにおけるハンセン氏病看護の講演やゼミでは、国内外の歴史や日本とタイでの感染症における課題の違い、看護の基本等について議論が交わされ、履修生には非常に有意義であった。こうした機会を得て、履修生は国内での感染症対策がそのまま国際的な対策すなわち国際看護となるためには、感染症看護の質が国際レベルであることが重要であることを学ぶことができた。高度な技術の実践や知識のためには、臨場感のある訓練や現場での体験が必要であり、特殊災害における実践技術については、SCAT JAPAN や非常勤講師の招聘により、放射性粉じん・生物兵器テロ・大規模災害等を想定シミュレーション訓練が物質・環境においてより充実した訓練や教育が可能になった。また、環境汚染の調査や細菌やウイルスの判断テストのキット等の購入により、リアルに技術を身につける練習や訓練が可能となり、教育も充実してきている。

履修生の研究・調査活動あるいは教育に係る教材提示やデータ収集・分析に必要な環境としては、PC やプロジェクター、統計ソフト、翻訳ソフト等充実し、被災地や国外への活動においても携帯できる教材等も整備した。

## 2. 教育プログラムの成果について

### (1) 教育プログラムの実施により期待された成果が得られたか

#### ①感染看護専門看護師教育課程の認可（日本看護系大学協議会）

本プログラムのプロフェッショナルコースカリキュラムは、平成 22 年度 7 月に日本看護系大学協議会における専門看護師制度の資格審査の申請を行い、承認された。このことは、本プログラムが看護師のキャリアアップを目指した教育課程であることの保障に繋がるものであり、本課程のコースワーク強化、履修生のアウトプットとしての将来的保障にもつながると考える。これにより、国内で院生が希望する感染症看護の専門性の高い施設での実習が可能となり、さらに専門あるいは認定看護師とのネットワークができたことで、より実践に即した教育が可能となり、改善・充実につながっている。

#### ②感染看護 CNS の育成と多様な組織への就職

入学志願者については、5 名程度を目標としていたが、2010 年 5 名、2011 年 2 名と充足していない（表 2）。また、2009 年の入学者 1 名、および 2010 年の入学者 4 名は 3 年間の長期履修生であり、2011 年 3 月までの修了生は社会人入学でプロフェッショナル・プログラムコースの学生 2 名で、現在 CNS の認定を目指して申請条件の事例展開およびレポート作成の段階にある。修了後の就職先や就職率の動向は重視するところで、現在までに新たな就職を必要とするアドバンスド・プログラム修了者は不在であり、入学者数や充足率の低下は課題である。こうした背景には、臨床における専門看護師のポジションが確立されておらず、CNS が魅力あるライセンスとなっていない現状がある。アドバンスド・プログラムにおいても、安定した嘱望される多彩な組織への就職が明確にはなっていない。

表 2 入学者数

年度	アドバンスド・プログラム	プロフェッショナル・プログラム
2009 年度	0 名	1 名
2010 年度	1 (1) 名	5 (4) 名
2011 年度	3 (2) 名	5 (0) 名

( ) は新入生

#### ③学生の研究活動や研究機関との共同研究の活性化

学生の活動量としては、国際学会での発表が 1 演題のみであったが、発表後学会誌への投稿の推薦を受けている。また、2011 年度の修士論文 2 題中、1 題を 2012 年日本感染症看護学会で採択され発表（2012 年 7 月 28 日）する。もう 1 題は、国際学会（The 9<sup>th</sup> International Conference with the Global Network of WHO）で採択され発表予定（2012 年 6 月 30 日）であり、国外の雑誌に投稿中である。くわえて、学生自身で学会セミナーや専門家学習会、集中講座等の情報を得て、積極的に参加する傾向を認めるようになった。これは、学生の自立的な学修や課題への取り組みへの変

化として、本プログラムの成果と捉える。

### 3. 今後の教育プログラムの改善・充実のための方策と具体的な計画

- (1) 実施状況・成果を踏まえた今後の課題が把握され、改善・充実のための方策や支援期間終了後の具体的な計画が示されているか

#### 今後の課題

##### ① 2つの類型化されたプログラムへの学生の入学志願者増員と就職の拡充

セミナー・講演会後の参加者へのアンケート調査では、講演内容およびディスカッションなどへの評価は高いが、大学院への履修については興味・関心はあるものの現在は考えていないとの回答が多く、キャリアアップへのハードルを高く認識している人が多い傾向であった。感染症専門看護師（ICN）の養成は、平成24年4月からの感染症に関連した診療報酬の改正からも、社会的必要性がさらに高まっていることは明白であり、改善策は、魅力ある就職先の確保、あるいは嘱望されるような職業への変革が必要と考える。本プログラムでは、支援期間終了後においても、セミナーやシンポジウムなどを開催し、キャリアアップしたスペシャリストの職場での活動の在り方やその活用法について、管理者やスペシャリスト、さらにジェネラリストや医師、医療チームを交えて、嘱望されるような活動や活用法について重ねて検討会や調査を行う計画である。

また、大学のインターンシップ（国際連携教育プログラム）等も活用し、院生の国外派遣や共同調査への取り組みを推進し、積極的に国外での就職についても開拓する計画である。

##### ② 研究活動の推進

バイオ統計学、感染医学とのコラボレート、国立感染研究所のFETP-J、疫学スペシャリストの集中講義、等により学生の感染症サーベイランス能力は確実に充足することができた。成果として、The 5th APSIC 国際学会での発表の後に学会より投稿の推薦を受けたり、Ann Arbor 医療システム患者安全推進プロジェクト（国際共同研究）と共同研究で、日本での調査データを分析し修士論文としてまとめ、2012年度国際学会（The 9th International Conference with the Global Network of WHO）で採択され発表予定であり、国外での学会誌に現在投稿中であること等を上げることができる。支援期間終了後においても、継続して研究活動を支援するとともに、国内・外研究者とのネットワーク構築を積極的に推進する計画である。

### 4. 社会への情報提供

- (1) 教育プログラムの内容、経過、成果等が大学のホームページ・刊行物・カンファレンスなどを通じて多様な方法により積極的に公表されたか

- ① 感染制御看護師（ICN）養成プログラムのホームページ（<http://icn.kurume-u.ac.jp/>）を作成し随時情報の更新を行っている。平成23年度には国際的見地に立ち英文のページを充実させた。
- ② 本プログラムの採択及び講演会等の活動については、学内の各広報紙に掲載され久留米大学ホームページ（<http://www.kurume-u.ac.jp/>）や大学院医学研究科ホームページ（<http://gmed.kurume-u.ac.jp/>）でも情報の閲覧が可能となっている。  
久留米大学広報（150号2010.1、151号2010.4）  
久留米大学 大学・入試案内（2011年度版、2012年度版）  
久留米大学大学院医学研究科ニュースレター  
（52号2009.3、53号2009.12、58号2011.3、61号2011.12）
- ③ 感染制御看護師（ICN）養成プログラムのリーフレットを作成し、講演会や入試案内時などにおいて幅広く広報活動に利用した。

④ 3年間の活動をまとめた報告書を現在作成中であり、近々関係各所に配布予定である。

## 5. 大学院教育へ果たした役割及び波及効果と大学による自主的・恒常的な展開

### (1) 当該大学や今後の我が国の大学院教育へ果たした役割及び期待された波及効果が得られたか

本プログラムは、多種多様なバックグラウンドをもつ社会人を対象とし、個人の教育課程やキャリアに応じ専門的知識・技術を獲得できるよう構成し、加えて国内外で必要とされている国際的感染症に対応できる実践能力の養成を機軸としている。具体的には、修了後の進路を想定し、アドバンスド・プログラムとプロフェッショナル・プログラムの類型化した2つのコースを展開し、国際的に活躍できる ICN と国内で専門的ライセンスを獲得し活動する CNS を養成する。この取組により、国内・外で研究者として活躍できる人材、特殊災害や災害時感染症あるいはパンデミック等で感染管理を遂行できる実践力・管理能力・コンサルテーション能力をもつ人材の育成が可能となった。九州のみならず関東や関西からも問い合わせや入学者があり、国際貢献や国際的活躍を希望する医療関係者やコメディカルにとっては、大いに魅力あるプログラムになったと考える。継続した修了生の輩出と、修了生の国際的な活躍の実績とその蓄積、さらに HP 充実の継続が、わが国の大学院全体の教育の実質化にさらに波及し効果が期待される。

### (2) 当該教育プログラムの支援期間終了後の、大学による自主的・恒常的な展開のための措置が示されているか

#### ① 支援体制について

支援期間修了後は、本プログラムを自主的に展開し継続する。ダブルコースのカリキュラムについては、シラバスおよび実習要項として学生に提示し、指導体制については、感染看護学、感染医学、バイオ統計学群による3学群合同検討会を開催し、課題等を大学院医学研究科委員会で審議・検討し、基礎医学群、社会医学群、分子生命科学群、臨床看護学群と協働で取り組む支援体制が組織化されており、継続してカリキュラムを整備する。両コースのフィールドワークにおける報告書について大学院医学研究科委員会による審査を受け、修了者の進路や活動状況の調査および研究報告などの業績を参考に、研究能力や専門的な実践能力の向上にむけたカリキュラムや支援体制の改善に反映させる。

#### ② 経済的支援について

「組織的な大学院教育改革推進プログラム」による3年間の経済的支援を受けて、教育・研究のハード面における機器・備品等の環境は概ねで整備された。また、国内・国外での専門家・大学施設等とのネットワークも継続が可能で学生の海外派遣が可能な段階にある。支援期間終了後は、研究・機器備品の維持管理、ソフト面での学生の国内・外への実習履修に係る経費等を必要とするが、大学院医学研究科の授業料の実験実習料等により自主的・恒常的に支援を継続し、本プログラムを推進する。

## 組織的な大学院教育改革推進プログラム委員会における評価

<b>【総合評価】</b>
<input type="checkbox"/> 目的は十分に達成された <input type="checkbox"/> 目的はほぼ達成された <input checked="" type="checkbox"/> 目的はある程度達成された <input type="checkbox"/> 目的はあまり達成されていない
<p>〔実施（達成）状況に関するコメント〕</p> <p>感染制御看護師養成を目指し、プロフェッショナルコース及びアドバンスコースの計画が着実に実施され、前者は、日本看護系大学協議会から、専門看護師教育課程の認定を受け、後者は国際的ネットワークの構築に向けて、大学院教育の改善充実に貢献している。</p> <p>社会への情報提供は十分になされているが、本コースへの入学者の確保が十分といえず、その理由の分析、および教育効果の検証が必要である。</p> <p>医学研究科と附属病院との連携は図られつつあるが、大学全体としての支援体制を明確にする必要がある。</p>
<p>（優れた点）</p> <p>感染制御看護師養成の教育モデルとなることは評価できる。</p> <p>（改善を要する点）</p> <p>志願者を増やすために、入学者への動機付けや修了後のキャリアアップの方策の検討が望まれる。</p>